

幼児のとらえる感情語の意味の解明 —感情語の主体に着目して—

東京大学大学院教育学研究科, 日本学術振興会 浜 名 真 以

The meaning of words for emotions in young children

Graduate School of Education, The University of Tokyo,

Japan Society for the Promotion of Science, HAMANA, Mai

要 約

感情語を使い始めたばかりの子どもは必ずしも適切な感情語をラベルづけるわけではない。自己と他者の感情理解を区別した研究においては、特にネガティブな感情について自己より他者を主体とした理解が優れることが示されているが、個々の感情語による違いや想定されやすい他者についての検討はされていない。そこで本研究は、幼児期の子どもにとって典型的な感情経験の主体とその内容を明らかにすることを目的とする。結果、幼児は大人に比べ、一部の感情において自己を主体とした感情経験を想定しにくく、個人的な内容の感情経験より社会的な内容の感情経験を想定しやすいことが示された。このことから、幼児は感情語をより限定的な意味で理解していることが示唆された。

【キー・ワード】 幼児, 言語発達, 感情

Abstract

Children who have just begun to use emotion words don't apply those words to situations appropriately as adults do. Although previous studies have shown that children understand the negative emotions of others better than their own negative ones, exactly which and whose emotions are easy or difficult for children to understand has not been investigated thoroughly. A series of experiments investigated whose emotions are easy or difficult for young children to understand in each emotional experience: their own, their friend's, their mother's or others'. The results show that in some emotions children have difficulty to access to their own emotional experience and that their typical emotional experience is related to social context in comparison to adults. This suggests that young children use emotion words only for limited references.

【Key words】 Young children, Language development, Emotion

問 題

「嬉しい」、「悲しい」といった感情語は感情理解のツールと言われている(Kopp,1989)。子どもは20か月前後に感情語を使い始めるが(Bretherton & Beeghly,1982)、幼児期には感情が生起する状況に対して必ずしも適切な感情語をラベルづけるわけではない(仲, 2010)。感情理解研究の文脈では、各感情に対応する状況を呈示して感情語をラベルづけさせる課題が行われ、幼児期にかけて課題の正答率が上昇することが明らかにされている。感情語を使えるようになってすぐに正確な意味範囲に対応づけるわけではなく、使用するうちに徐々に意味範囲を変化させていく(浜名・針生, 2015)。さらに、喜びは正答されやすく怒りは正答されにくいといったように感情ごとに正答率が異なることもわかっている(e.g., Widen & Russell, 2010)。しかし、これらの研究の多くは感情経験の主体を明確にせず、もしくは主体による違いを考慮せずに行われてきたという問題が指摘されている(菊池, 2006)。自己を主体とした場合の感情理解と他者を主体とした場合の感情理解を同様に考えてよいのだろうか。

感情経験の主体が自己であるか他者であるかについて検討した研究では、各感情経験の有無やその内容が問われてきた。少なくとも一部の感情について、幼児期では自己より他者を主体とした感情経験の認識が先行することが示されている。久保(2007)は5, 6歳児を対象に、喜び、悲しみ、怒りについて、自己を主体とした感情経験(嬉しい気持ちになったことがあるか)と他者である幼稚園の子どもを主体とした感情経験(嬉しそうにすることがあるか)を尋ねている。喜び経験については5, 6歳児ともにほとんどの子どもが自己や他者を主体とした経験があると回答するものの、5歳児では自己、他者どちらを主体としたネガティブな感情についても経験があると回答する子どもは少なく、悲しみ経験については75%、怒り経験については50%前後であった。そして、6歳児になると多くが他者を主体とした悲しみと怒りを経験していると回答するようになるものの、自己を主体とした怒りや悲しみ経験があると回答する子どもはそれぞれ80%、65%にとどまった。このことから、自己を主体とした悲しみ経験や怒り経験に比べ、他者を主体とした悲しみ経験や怒り経験の方がアクセスしやすい、もしくは対象化しやすい、報告しやすいと考察されている(久保, 2007)。さらに、4~6歳児では自己を主体とした喜びは自己を主体とした悲しみ、怒りに比べて経験があると回答する子どもが多く、また、悲しみ、怒りを喚起する状況を尋ねる場合に、自己より架空のキャラクターを主体とした方がもっともらしい回答が得られることもわかっている(Kubo, 2000)。また、様々な強度の悲しみ経験の有無を尋ねると、7歳児は5歳児に比べ悲しみ経験が少ないこと、高頻度で経験する感情として5歳児も7歳児も喜びを選択しやすいが、5歳児は7歳児に比べて悲しみを選択しにくいことが示されている(Glasberg & Aboud, 1982)。

状況を呈示してそこで生じる感情を推論させる課題でも、主体が自己であるか他者であるかによる違いが見出されている。喜び、悲しみ、怒りを生起する状況について、4, 5歳児では自己を主体として尋ねた場合と架空の子どもである他者を主体として尋ねた場合で成績に差がないが、3歳児では自己を主体とするより他者を主体とした方が成績が良いことが示されている(菊池, 2006)。別の研究では、6歳児は自己より他者を主体とした場合にネガティブな感情を回答しやすいという結果も示され

ている(Karniol & Koren, 1987)。年齢や感情の種類については研究間での一致が見られないものの、感情推論の研究でもネガティブな感情については自己より他者を主体とした理解が先行していることが示唆されている。

感情語の発話に関する研究では、感情が自己を主体として使用されているのか、他者を主体として使用されているのが検討されている。母親の報告によると、28か月児は感情語を使用する際、他者を主体とした感情のみに言及するより自己を主体とした感情のみに言及する子どもが多く(Bretherton & Beeghly, 1982)、園での観察場面でも4、5歳児が感情語を使用する際、全体として他者より自己について言及しやすいことがわかっている(Fabes, Eisenberg, Hanish, & Spinrad, 2001)。しかしながら、ポジティブな感情語は自己を主体として、怒りや悲しみは他者を主体として使用しやすいこともまた明らかとなっている(Fabes et al., 2001)。つまり、全体で見ると自己を主体とした感情語の使用が先行するよう見えるが、感情によって分けると、ネガティブな感情については他者を主体とした感情語の使用が先行することが示唆される。これは前述した感情経験や感情推論の研究の結果と矛盾しない。

以上に概観してきたことから、幼児期の子どもにおいては一部の感情では自己より他者を主体とした理解が先行していることがうかがえる。幼児ははじめ、「嬉しい」は自分が経験しやすい感情、「怒る」は母親が経験しやすい感情というように、感情経験や感情語の主体を限定的にとらえているのかもしれない。本研究では、喜び、悲しみ、怒りに加え、先行研究では検討されてこなかった恐怖、嫌悪、驚きを含めた基本6感情の経験を尋ね、幼児が自己を主体とした経験をとらえにくいのか、また、誰を主体として経験を想起しやすいかを感情ごとに分析する。さらに、感情経験の内容を二人称アプローチの観点から考察する。二人称アプローチでは、他者の心的状態を推論するものとしてとらえず、「あの人」である他者を直接的かつ情動的なかわりの中で経験すると考えている(Reddy, 2008)。Reddy(2008)によれば、他者を知覚すると同時に自分自身の行為や自分自身の反応を感じるといった自己受容感覚的な経験がなされる。そのため、他者の感情は関係性の中で様々な理解される可能性がある。そこで、幼児が感情経験を語る際に社会的かわりに言及するかを検討し、人との関係性の中で子どもが感情を理解していくことについて考察する。これらを通して、幼児が理解している感情語の意味をより精緻にとらえることを目的とする。

研究 1

目 的

幼児は自己を主体とした喜び経験に比べて自己を主体とした悲しみ経験や怒り経験をとらえにくいことが示されている。しかし、自己を主体とした経験をとらえにくいことがネガティブ感情すべてに当てはまるのか、喜び以外の感情に当てはまるのか、怒りと悲しみの感情についてのみなのかは不明である。そのため、研究 1 ではまず幼児に基本 6 感情の自己を主体とした経験の有無を尋ね、怒り、悲しみ以外の感情も喜びと比べてとらえにくいのかを検討する。

方法

参加児

2歳児クラス25名(レンジ:2歳8か月~3歳7か月, 平均年齢:3歳1か月, 男児15名, 女児10名), 3歳児クラス24名(レンジ:3歳8か月~4歳6か月, 平均年齢:4歳1か月, 男児10名, 女児14名), 4歳児クラス26名(レンジ:4歳8か月~5歳7か月, 平均年齢:5歳1か月, 男児14名, 女児12名), 5歳児クラス24名(レンジ:5歳6か月~6歳7か月, 平均年齢:6歳1か月, 男児11名, 女児13名)が参加した。

手続き

各感情経験の有無について「嬉しい(悲しい, 怒る, いや, 怖い, びっくり)って思ったことある?」と尋ねた。

結果

各感情経験を「ある」, 「ちょっとある」などと回答した場合は感情経験あり, 「ない」, 「あんまりない」と回答した場合は感情経験なしとしてカウントし, 感情語ごとに, 年齢クラス×経験の有無の χ^2 分析をしたところ, いずれの感情語でも年齢クラスによる違いはなかった(*n.s.*)。そのため, 年齢クラスをまとめてQ検定を行ったところ, 感情によって経験の有無が異なることが示された($\chi^2(5)=48.73$, $p<.001$)。マクネマー検定によるボンフェローニの多重比較では, 喜びを経験した人数は驚き, 悲しみ, 恐怖, 怒り, 嫌悪を経験した人数より有意に多かった($\chi^2(1)=18.9$, $p<.001$; $\chi^2(1)=22.1$, $p<.001$; $\chi^2(1)=26.5$, $p<.001$; $\chi^2(1)=30.9$, $p<.001$; $\chi^2(1)=19.7$, $p<.001$)。年齢クラスをまとめた感情ごとの経験者の割合を図1に示す。喜びの感情経験者は90%以上, 他の感情経験者は60%前後であった。

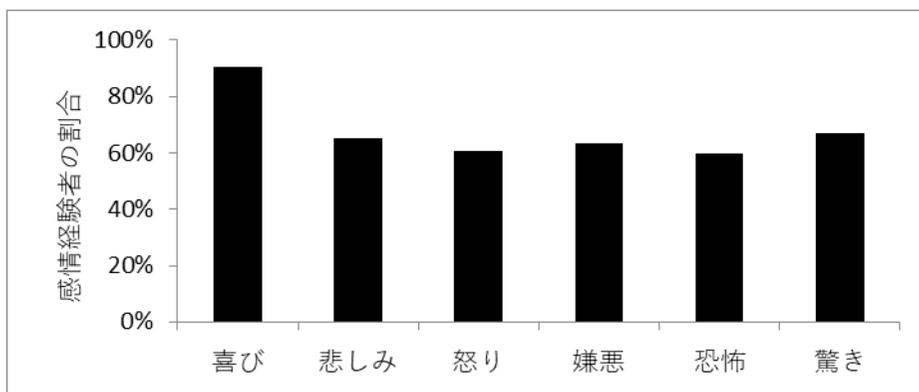


図1 自己を主体とした感情経験者の割合

考 察

クラスによらず喜びに比べ悲しみ、怒り、嫌悪、恐怖、驚きの自己を主体とする経験をとらえている子どもが少なく、それらの自己を主体とした感情経験がないと回答する子どもがそれぞれ4割前後存在した。このことから、悲しみ、怒り以外のネガティブ感情に加え、驚きについても自己を主体とした感情経験をとらえにくいことが明らかとなった。年齢クラスによる違いはなかった。

研究 2

目 的

研究 2 では幼児が誰を主体として感情経験を想定しやすいか、人とのかかわりの中で感情経験をとらえているのかについて検討する。先行研究では、他者の感情について検討する際、他者として友達や架空の子どもが設定されていたが、子どもの周りには友達に加えきょうだいや身近な縦の関係にある両親や先生といった様々な他者が存在する。そこで本研究では、各感情経験について誰の経験を想定するのか、その主体を具体的に尋ね大人と比較することで、子どもが日常生活においてどのように感情を理解しているかを明らかにする。さらに、感情経験の内容において社会的かかわりに言及しているか否かを検討し、子どもが人とのかかわりの中で感情を理解していくのかについても考察する。

方 法

参加児

4歳児クラス 26名(レンジ：4歳9か月～5歳8か月，平均年齢：5歳1か月，男児13名，女児13名)，5歳児クラス 22名(レンジ：5歳9か月～6歳7か月，平均年齢：6歳，男児11名，女児11名)，大人 15名(レンジ：25～28歳，平均年齢：26.3歳，男性8名，女性7名)が参加した。

手続き

練習課題と本課題の2フェーズから成った。練習課題は、参加児が状況について実験者に説明することに慣れることを目的として行われた。対象児と同性の子どものキャラクターが登場する6つのイラストを1枚ずつ提示し、その状況を説明させた。その際、実験者から感情についての言及は行わなかった。

本課題では、「嬉しい、悲しい、怒る、いや、怖い、びっくりすることってあるよね」と一度6つの感情語を聞かせた後、それぞれについて、「嬉しい(悲しい、怒る、いや、怖い、びっくり)ってどんな気持ちだと思う？○○ちゃん(参加児の名前)やみんなはどんなとき嬉しい気持ちになるかな？○○ちゃんが嬉しい気持ちになるときでも、お友達が嬉しい気持ちになるときでも、お母さんが嬉しい気持ちになるときでもいいよ。」と尋ね、感情経験について想起、回答させた。主体が不明瞭な回答だ

った場合は、「誰の気持ちかな？」と質問を加えた。感情語の呈示順はランダムであった。

大人を対象とした調査はインターネット上のアンケートを通じて行った。6 つの感情語を呈示し、それぞれどのようなときに経験するかを尋ねた。内容は参加者自身の経験でも、他の人の経験でも、一般的な人の経験でも構わないとし、誰の気持ちかを明確に回答するよう指示した。

結 果

感情経験の主体

各感情において主体を明確に回答できた者を分析の対象とした。年齢群ごとの有効回答者の割合を表 1 に示す。次に、回答の内容から感情の主体を、自己、他者、一般に分類した。「ママ」、「○○ちゃん(弟の名前)」、「お友達」といった回答は他者に、「みんな」、「(叩かれた)人」といった回答は一般に分類した。複数の人物の経験に言及した場合には、先に言及した人物に基づいて分類した。各感情経験について、年齢群ごとの自己、他者、一般の回答者の割合を図 2~7 に示す。大人の回答者には喜び、悲しみ、驚きについて他者を主体としたエピソードを回答した人がいないことがわかる。

各感情について誰を主体としてとらえやすいかの年齢による違いを明らかにするため、それぞれの感情ごとに、年齢群(4 歳児クラス, 5 歳児クラス, 大人)×主体(自己, 他者, 一般)の χ^2 検定を行ったところ、「嬉しい」、「怒る」でのみ有意差が認められた(それぞれ $\chi^2(4) = 11.95, p < .05$; $\chi^2(4) = 12.91, p < .05$)。残差分析の結果、喜びについては、4 歳児クラスの子どもでは自己の感情経験を回答した人が少なく、他者の感情経験を回答した人が多かった($ps < .05$)。怒りについては、4 歳児クラスの子どもでは自己の感情経験を回答した人が少なく、他者の感情経験を回答した人が多かったが、大人では自己の感情経験を回答した人が多く、他者の感情経験を回答した人が少なかった($ps < .05$)。4 歳児クラスの他者を主体とした喜び経験の回答のうちもっとも多かったのは友達の喜びエピソードで(4 歳児クラス名 7 名中 4 名)、4 歳児クラス, 5 歳児クラスによる他者を主体とした怒り経験の回答のうちもっとも多かったのは母親の怒りのエピソードであった(4 歳児クラス 18 名中 10 名, 5 歳児クラス 10 名中 8 名)。

表 1 主体分析における有効回答者数と全参加児における割合

	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	恐怖	驚き
4歳児クラス(N=26)	25名 96.2%	20名 76.9%	25名 96.2%	22名 84.6%	20名 76.9%	20名 76.9%
5歳児クラス(N=22)	22名 100.0%	22名 100.0%	19名 86.4%	22名 100.0%	20名 90.9%	22名 100.0%
大人(N=15)	14名 93.3%	15名 100.0%	14名 93.3%	15名 100.0%	14名 93.3%	14名 93.3%

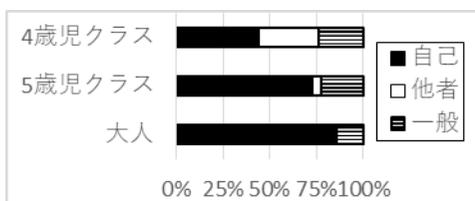


図2 喜び経験の主体

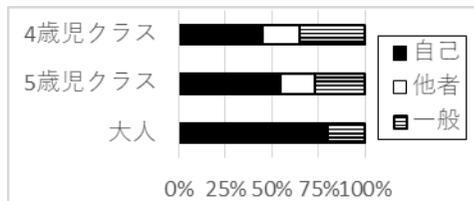


図3 悲しみ経験の主体

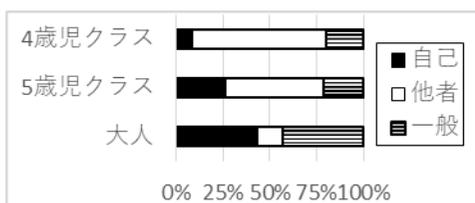


図4 怒り経験の主体

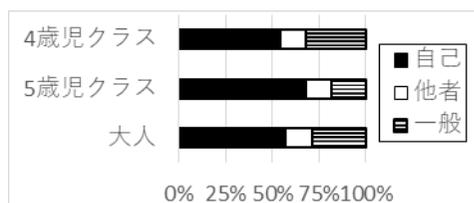


図5 嫌悪経験の主体

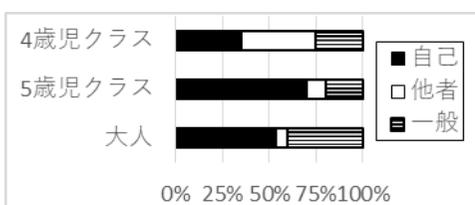


図6 恐怖経験の主体

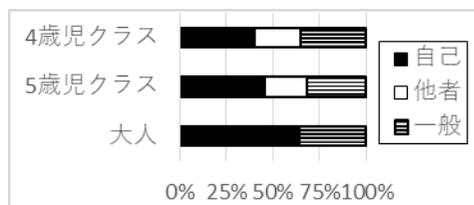


図7 驚き経験の主体

感情経験における社会的かかわりの有無

回答された感情経験が社会的エピソードか個人的エピソードかについて検討した。社会的エピソードとは、けんか、プレゼントをもらうなどの社会的なかかわりが言及されているものであり、個人的エピソードとは、事故にあう、雨が降るなど社会的なかかわりが言及されていないエピソードである。ここでは、主体が明確であり、かつ内容が社会的エピソードか個人的エピソードか判断可能な回答のみを対象として検討した。ここでの有効回答者数と全参加児のうちの有効回答者の割合を表2に示す。

表2 社会的かかわりの分析における有効回答者数と全参加児における割合

	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	恐怖	驚き
4歳児クラス(N=26)	22名 84.6%	18名 69.2%	20名 76.9%	22名 84.6%	20名 76.9%	20名 76.9%
5歳児クラス(N=22)	22名 100.0%	20名 90.9%	17名 77.3%	21名 95.5%	18名 81.8%	22名 100.0%
大人(N=15)	14名 93.3%	13名 86.7%	14名 93.3%	14名 93.3%	15名 100.0%	13名 86.7%

喜び 自己を主体とした喜び経験の回答について、幼児の回答は全て、友達と遊ぶ、母親からプレゼントをもらうなどの社会的エピソードであった(4歳児クラス11名中11名、5歳児クラス16名中16名)。一方、大人の回答は、社会的エピソードが過半数であったものの(12名中7名)、定時で帰れる、お金持ちになるなどの個人的エピソードも見られた(12名中5名)。他者を主体とした回答でも、幼児では全て社会的エピソードであった(4歳児クラス6名中6名、5歳児クラス1名中1名)。そのなかかわりの相手が明確な回答のうち、かかわりの相手が自己である回答(自分が手紙をあげると友達が嬉しい、など)が過半数であった(4歳児クラス5名中3名、5歳児クラス1名中1名)。大人では他者を主体とした回答はなかった。一般の人を主体とした回答については、幼児では社会的エピソードが多かったものの(4歳児クラス5名中5名、5歳児クラス5名中3名)、誕生日に年齢が上がること、遊園地に行きお菓子がたくさんあることなど、個人的エピソードの回答も見られた(5歳児クラス5名中2名)。大人では、一般の人を主体として回答したのは2名で、社会的エピソードと個人的エピソードが1名ずつであった。

悲しみ 自己を主体とした悲しみ経験の回答については、幼児の回答は全て、友達とのいざこざ、叱責を受けること、ひとりぼっちなどの社会的エピソードであった(4歳児クラス9名中9名、5歳児クラス11名中11名)。大人による自己を主体とした回答も社会的エピソードがほとんどであったが(11名中10名)、自分の力不足などの個人的エピソードも見られた(11名中1名)。他者を主体とした回答については、幼児では社会的エピソードが多く(4歳児クラス3名中2名、5歳児クラス4名中4名)、そのうち、自己とのかかわりについての回答はなかった。大人では他者を主体とした回答はなかった。一般の人を主体とした回答については、幼児の回答は全て社会的エピソードであり(4歳児クラス6名中6名、5歳児クラス5名中5名)、大人では全て個人的エピソードであった(2名中2名)。

怒り 幼児による怒り経験の回答は、単に「お母さんが怒る」のみの回答のような社会的エピソードか個人的エピソードか判断不可能なものが多く、検討の対象となったのは4、5歳児クラスを合わせて全体の77.0%である。主体を問わずその全てが社会的エピソードであった(自己については4歳児クラス2名中2名、5歳児クラス4名中4名、大人8名中8名；他者については4歳児クラス13名中13名、5歳児クラス9名中9名、大人2名中2名；一般の人については4歳児クラス5名中5名、5歳児クラス4名中4名、大人4名中4名)。幼児による他者を主体とした回答で、かかわりの相手が明確な回答のうち、かかわりの相手が自己である回答(自分がごはんを食べないと母親が怒る、など)をした者がは過半数であった(4歳児クラス8名中5名、5歳児クラス6名中5名)。他者を主体とした怒りのエピソードは母親を主体とするものが多かったことを考慮すると、幼児期の他者を主体とした怒り経験の回答は、自分が母親に怒られる、叱責されるエピソードが多かったと言える。大人による他者を主体とした怒りについての回答はそもそも少なく、自己の行為によって他者に怒ら

ⁱ 家族の死、ひとりぼっちなどの回答は、社会的なかかわりの喪失という意味で社会的エピソードと見なした。

れるというエピソードは見られなかったものの(2名中0名)、大人でも、母親が子どもに怒るという一般のエピソード、回答者である母親自身が子どもに怒るという自己についてのエピソードが回答されていた(14名中2名)。

嫌悪 自己を主体とした嫌悪経験の回答は、幼児では社会的エピソードが多かったものの(4歳児クラス12名中12名、5歳児クラス14名中13名)、縄跳びを飛ばないという個人的エピソードも見られた(5歳児クラス14名中1名)。一方、大人では、社会的エピソードは少なく(8名中2名)、嫌いなものを食べることなどの個人的エピソードが多かった(8名中6名)。他者を主体とした嫌悪経験の回答は、幼児も大人も全て社会的エピソードであった(4歳児クラス3名中3名、5歳児クラス3名中3名、大人2名中2名)。社会的かかわりの相手が明確な回答のうち、かかわりの相手が自己である回答は少なく(4歳児クラス3名中1名、5歳児クラス2名中0名)、大人では見られなかった(2名中0名)。一般の人を主体とした回答について、幼児では社会的エピソードの回答が多かったものの(4歳児クラス7名中6名、5歳児クラス4名中3名)、お菓子が無いなどの個人的エピソードも見られた(5歳児クラス13名中1名)。一方、大人では、社会的エピソードと個人的エピソードの回答は同数であった(それぞれ4名中2名)。

恐怖 自己を主体とした恐怖経験の回答について、幼児も大人も個人的エピソードの回答が多く(4歳児クラス7名中5名、5歳児クラス14名中9名、大人8名中6名)、おぼけが出る、暗いところなどの内容であった。個人的エピソードは叱責を受けるなどであった(4歳児クラス7名中2名、5歳児クラス14名中5名、大人8名中2名)。他者を主体とした回答については、幼児では社会的エピソードが過半数であった(4歳児クラス8名中5名、5歳児クラス1名中1名)。社会的かかわりの相手が明確な回答のうち、かかわりの相手が自己である回答はなかった(4歳児クラス4名中0名、5歳児クラス1名中0名)、大人では他者の経験を回答したのは1名で個人的エピソードであった。一般の人の経験の回答については、幼児も大人も個人的エピソードの回答が多かった(4歳児クラス5名中3名、5歳児クラス3名中3名、大人6名中4名)。

驚き 自己を主体とした驚き経験の回答について、幼児では友達に突然声をかけられるなどの社会的エピソードの回答が多く(4歳児クラス8名中6名、5歳児クラス10名中7名)、大人では、虫を見たときなど個人的エピソードが多かった(9名中5名)。他者の経験の回答については、幼児では社会的エピソードの回答(4歳児クラス5名中3名、5歳児クラス5名中2名)、個人的エピソードがほぼ同数であった(4歳児クラス5名中2名、5歳児クラス5名中3名)。社会的かかわりの相手が明確な回答のうち、かかわりの相手が自己である回答はほとんどなかった(4歳児クラス2名中1名、5歳児クラス2名中0名)、大人では他者の経験の回答はなかった。一般の人の経験の回答については、幼児は社会的エピソードの回答が多く(4歳児クラス7名中6名、5歳児クラス7名中6名)、大人は個人的エピソードの回答が過半数であった(大人6名中4名)。

考 察

経験される感情ごとに年齢群で比較を行ったところ、4歳児クラスの子どもは、喜び経験と怒り経

験の主体として自己を想定しづらく他者を想定しやすいことが示された。さらに、幼児は人とのかかわりに言及した社会的エピソードを回答することが多く、社会的なかかわりの中で感情経験を想定しやすいようである。その中でも喜びと怒りでは、自分とかかわった他者が喜びや怒りを経験するエピソードの回答が多かった。特に怒りでは自分とかかわって母親が怒りを経験するエピソードが多かったことから、怒りという感情を自分が経験する感情というより限定的な場面で他者が経験する感情ととらえている可能性がある。かかわり合う相手の怒りに対して子どもは不安や恐怖を覚えたり、泣いたり、怒りに対して怒りを感じたり、言い返したりといった反応をするはずであり、こうした子どもの反応を子ども自身が感じ取る自己受容感覚的経験を通して他者を主体とした怒りを理解していくのかもしれない。悲しみ、嫌悪、恐怖、驚きでは、他者と自己のかかわりにおける他者を主体としたエピソードは見られない、もしくは少数であった。しかし、このような他者同士のかかわりを見ている自己が存在しているはずであり、なんらかのかかわりを持っている可能性もあるため、今後詳細に検討する余地がある。

一方で大人は、喜び、悲しみ、驚きについては他者を主体とした感情経験を回答した人はおらず、怒り以外の感情経験では自己を主体とした回答が過半数であった。怒り経験についても4、5歳児と相対的に見て、自己を主体として想定しやすく他者を想定しにくいことがわかった。さらに、大人は全体的に人とのかかわりに言及しない個人的エピソードの回答が多かった。これらのことから、幼児は大人とは異なり、典型的な感情経験として自己を主体としたエピソードを想定しにくいと言える。また、幼児は大人に比べ、社会的エピソードを多く回答し、個人的エピソードの回答が少なかったことから、子どもから大人になるにつれて社会的な場面のみならず個人的な場面でも感情経験をとらえやすくなると考えられる。

このように、典型的な感情経験として幼児が想定しやすいものと大人が想定しやすいものは、主体においても内容においても異なるようである。どのような時にどの感情が生起するかといった感情の理解の前に、主体を限定したより狭い意味で感情語を理解している可能性がある。但し本研究における回答は主体が多様であり、主体ごとの有効回答者数が少ないため、内容について今後より精緻に検討していく必要がある。

総合考察

幼児は自己を主体としたネガティブ感情や驚き感情の経験をとらえにくく、また、大人とは異なり一部の感情において自己を主体とした感情経験を想定しにくいことがわかった。さらに、感情経験の内容も社会的なエピソードが多く個人的なエピソードが少ない点で大人とは異なっていた。つまり、先行研究では幼児期の感情語の意味や支持範囲、つまり感情語と状況の対応づけが大人とは異なることが示されてきたが、それに加え、本研究により典型的と考える感情語の主体も異なること、また社会的かかわりの有無といった内容も異なることが明らかとなった。このことから、自己の当てはめや理論を用いて他者を理解するのではなく、はじめは関係性の中で自他の感情経験がより限定的に理解されており、それが徐々に統合され、感情の一般的な理解に発展していくのかもしれない。

引用文献

- Bretherton, I., & Beeghly, M. (1982). Talking about internal states: The acquisition of an explicit theory of mind. *Developmental Psychology*, 18, 906–921.
- Fabes, R. A., Eisenberg, N., Hanish, L. D., & Spinrad, T. L. (2001). Preschoolers' spontaneous emotion vocabulary: Relations to likability. *Early Education and Development*, 12, 11-27.
- Glasberg, R., & Aboud, F. (1982). Keeping one's distance from sadness: Children's self-reports of emotional experience. *Developmental Psychology*, 18, 287–293.
- 浜名真以・針生悦子. (2015). 幼児期における感情語の意味範囲の発達の变化. *発達心理学研究*, 26, 46-55. w
- Karniol, R., & Koren, L. (1987). How would you feel? Children's inferences regarding their own and others' affective reactions. *Cognitive Development*, 2, 271–278.
- 菊池哲平. (2006). 幼児における状況手がかりからの自己情動と他者情動の理解. *教育心理学研究*, 54, 90-100.
- Kopp, C.B. (1989). Regulation of distress and negative emotions: A developmental view. *Developmental Psychology*, 25, 343–354.
- Kubo, Y. (2000). Young children's views of emotions in themselves: Preschooler's reporting about their own emotional experiences. *東洋大学社会学部紀要*, 38, 75-86.
- 久保ゆかり (2007). 幼児期における感情表出についての認識の発達：5歳から6歳への変化. *東洋大学社会学部紀要*, 44, 89-105.
- 仲真紀子. (2010). 子どもによるポジティブ、ネガティブな気持ちの表現：安全、非安全な状況にかかわる感情語の使用. *発達心理学研究*, 21, 365–374.
- Reddy, V. (2008). *How infants know minds*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (佐伯胖 (訳). (2015). *驚くべき乳幼児の心の世界：「二人称アプローチ」から見えてくること*. ミネルヴァ書房.)
- Widen, S. C. & Russell, J. A. (2010). Differentiation in preschoolers' categories for emotion. *Emotion*, 10, 651-661.

謝 辞

研究にあたりご指導いただきました東京大学大学院の針生悦子教授に感謝申し上げます。また、本研究にご協力いただきました横浜市の青葉保育園の園長先生をはじめとする先生方、園児の皆様にご心より御礼申し上げます。研究の実施にあたっては、天野聡子さん、沖野昇平さん、小池志昂さん、山内勇太郎さんにご協力いただきました。記して謝意を表します。

